

テーマ2 「看護大学の教員は足りているか」

文責：寺岡征太郎(和洋女子大学)

テーマ2では、岡谷恵子先生による「看護大学の教員は足りているか」というプレゼンテーションを受けて参集した参加者とともに、まさに自分たちが今直面している課題や問題、実情を共有しあうところからスタートした。

以下、箇条書きであるが、参加者の発言内容を記録する。

テーマに対する率直な思いや考えなどの共有

- ・ 机上の学習と臨床での実習、この両者を十分に満たすことができる教育を展開したいが、現実的にはかなり厳しい状況がある。このような状況下、教員自身の情熱によってカバーするしかないと感じるときがある。
- ・ 大学の設置主体によって教員配置数にばらつきがある。同じ看護学を学ぶ学習者にとっても、教員配置数によってずいぶん環境・支援体制が変わってくる。これは仕方のないことなのだろうか。
- ・ 教育効果を高めるために TA を採用し、教員不足を補っている。
- ・ 教員は不足しているが、研究成果を臨床にフィードバックするように努力している。
- ・ 大学院修士課程および博士課程で教育できる教員を育てていくことも重要な課題ではないか。
- ・ Faculty Development が不十分だと思う。「教員になるための教育」を受ける機会がない。
- ・ (発言者の)看護教員数は 60 名を超えるが、経営側からは人員削減の声があがっている。
- ・ 看護専門分野をもたずに看護教育を展開する教育機関もある(精神の教員が小児を教えることもある…)。
- ・ 実習期間中、遠方の実習施設から夕方大学に戻り、それから授業を行うこともある。スケジュールの調整が難しく、授業準備が深夜に及ぶこともある。
- ・ 心身の不調を訴える教員も少なくはなく、退職に至るケースもある。しかし、年度途中では補充がされない。
- ・ 基礎看護学を担当しているが、臨地実習が少ないためか、暇そうにしていると思われる。実際にはその準備や研究活動でかなりの時間を費やしている。領域によって業務量にも差があるのかもしれない。
- ・ 実際に教員不足はあるのだろうが、自分自身の(教員としての)能力不足の課題も大きいと感じている。

看護学が実践科学というならば、実践をどれだけ見えるように教育していけるのかが重要

- ・ 教員数が増えればよいという問題ではない。
- ・ 社会貢献活動で評価されるところがあり、重要な要素だと思う。
- ・ 臨床を巻き込んだ教育・研究活動の展開が必須だが、時間管理が難しいといった課題を抱えている。
- ・ 看護現場の忙しさと、教員の忙しさは似ているところがあり、課題は共通しているようにも思う。

多くの教員は問題や課題を抱えているが、何をクリアしていけばよいのかを考えたい

- ・ 必要な教員数の割り出しができていない。必要配置人数のコンセンサスを得るために、他の医療系学部(医学部・薬学部)の基準を参考にできるのではないかな。
- ・ 医学部のように教育と臨床(診療)を主たる業務とするといったスタイルを参考に、看護教員の働き方を変えていく必要があるかもしれない。
- ・ 現場の生き生きした看護を教えることができる教員になりたいと思い、実践者・教育者・研究者の役割をこなしてきた。時間管理が難しく、体調を崩す時期もあったが、理解ある医師のもとで臨床家としても実践を積み重ねることができた。何よりも、臨床は楽しかった。
- ・ 教員をしながら、CNSとして週に1日、臨床で活動している。CNS活動として考えた場合、週に1日の活動では十分ではないと感じている。実践内容を教育へ還元することを上長にも説明し、上長の理解が得られている。
- ・ 臨床から離れ教育だけに没頭していると、臨床能力・臨床の感覚を失っていくことへの恐怖を感じた。一方、臨床のことは臨床家に任せ、教員が学内の業務に従事すればよいと考える教員も存在する。看護学教育の特性についても認識に差異がある状況は否めない。
- ・ タイムスタディなどの方法を用いて、教員の時間管理の実情を把握することも必要ではないかな。

以上、本セッションでは、参加者自身が直面している状況を共有しあったが、教員が足りている、足りていない、といった数の問題だけではなく、質の高い看護学教育を実現するためには何が必要なのか、といったテーマのもとに意見交換が進んでいった。そして、質の高い看護学教育には、教員自身が臨床感覚を持ち続けることや、教員としての働き方の見直しなどがカギとなることを共有し、教育と臨床での活動のバランスをうまく保ちながら働くことについて改めて振り返る機会となったように思う。